

多摩にゆかりのある文人を訪ねる中央線の日

東京都立川市立立川第八小学校
井上紋子



三鷹市

山本有三記念館



利用された。筆者はここで、レトロな雰囲気をしみながら読書教育の話を聞き、学んだ思いがある。

三鷹駅南口を出て左に折れて、玉川上水に沿って歩く。玉川上水は、兩岸から覆い隠すように木々が繁りさわやかな風を運んでくる。むらさき橋を過ぎると、右手の少し奥まった所の木々の間から瀟洒な洋館が見えてくる。これが大正末期の本格的な欧風建築であり、文豪山本有三の旧宅（山本有三記念館）である。ここ有山は、『路傍の石』や『米百俵』などの執筆をし、新派名遣い・当用漢字の制定・憲法の口語化など、文学者また文人政治家として活躍した。家は、昭和三十一年に都に寄贈され、都立教育研究所三鷹分室として敷地内の建物が教職員の研修の会場としても

作家太宰治ゆかりの地

作家太宰治は、三十歳で結婚し三鷹に移り住んだ。三人の子どもを設け、『走れメロス』『女生徒』『人間失格』『斜陽』など精力的に執筆を続け、三十九歳で山崎富栄と玉川上水で入水自殺をするまでこの地で暮らした。住んでいた家は立て替えられて路地しか残っていないが、『おさん』に出てくる、太宰の家の庭にあった百日紅の木は、近くの「みたか井心亭」に移植されている。



入水の地には、太宰の故郷青森県金木町（現五所川原市）産の石が「玉鹿石」と刻まれている。禅林寺には、太宰の墓が森鷗外（林太郎）の墓と前後してあり、「桜桃忌」（六月十九日）には、多くの人が訪れる。



さらに、詩人の与田準一や吉田一穂、作家瀬戸内寂聴（晴美）の旧居跡などがある。

ここから南下した町田市には、『ひろがる言葉 小学国語5下』に載っている『素朴な琴』の作者、八木重吉の記念館もある。ここは個人管理の施設で、訪問には事前の予約が必要である。

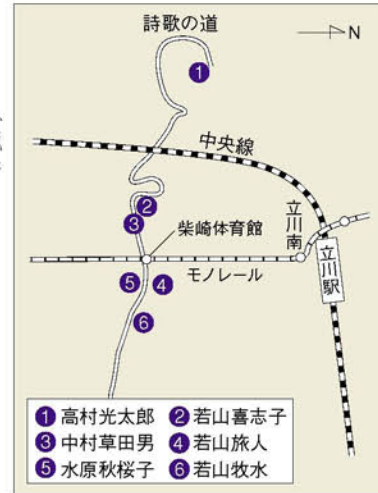


このほかにも、市内には、武者小路実篤、三木露風の旧居跡がある。駅から南にまっすぐの道を進むと、露風の童謡「赤とんぼ」のちよつと滑稽な碑があり、少し進むと道を隔てて、実篤の地球をY字の台座が支えた「人間萬歳」の碑がある。

立川市

詩歌の道

JR中央線下り電車に乗り、西に向かう。十五分ほどで立川駅に着く。改札口を出て左に進むと、南口バスロータリーの上のコンコースに出る。そこから真っ直ぐに伸びる道を約1km歩いて南下すると、左右に涼しげな木立が見えてくる。両岸が遊歩道になっていて、根川が流れている。これが「詩歌の道」である。歩いてきた道の真上には多摩都市モノレールが通っていて、柴崎体育館駅で降りる方法もある（立川南駅から一つめ・百円）。余力を残して根川をゆっくり散策するために、見晴らしのいいモノレールに乗るのもお勧めである。



和歌

冬の水 一枝の影も 欺かず

中村 草田男

多摩川の浅き流れに石なげて

遊べば濡るるわが袂かな

若山 牧水

初日さす松はむさし野にのこる松

水原 秋桜子

多摩の地に住み、拠点を置いて活躍した人々の作品である。若山牧水の妻の喜志子は、晩年息子で歌人の旅人（立川在住）の下に身を寄せ活動が続けた。二人の碑も牧水の碑の近くにある。（牧水の碑は、立川駅北口バスロータリー①番の先にもある。桜と楓の木の横の信号の脇に忘れられたように……。

立川の駅のお茶屋さくら樹のもみぢのかげに見送りし子よ 牧水



この「詩歌の道」は、西は立川市民族資料館から残堀川憩いの水辺をたどり立川橋の手前で根川緑道に入り貝殻橋まで約二・四km続いている。立川市にゆかりのある人の句碑・歌碑・詩碑を建て、市民の憩いの場所として親しまれている。



ちよつと夕刻に迫るころ、夕日が山々を赤く染め、からすの鳴き声が聞こえてきそうな、子どものころにタイムスリップしたような懐かしい気持ちに、時を忘れる。



都農業試験場の前にある高村光太郎の詩碑「葱」は、試験場長夫人が妻智恵子の友人で、立川で採れた葱を送った時に詠まれたものである。

八王子市

童謡「夕焼け小焼け」

時間に余裕があったら、中央線で高尾駅下車。北口から「陣馬高原下行き」のバスで約三十分、「夕やけ小やけふれあいの里」の資料館に、ここ上恩方出身の中村雨紅の展示がある。道を隔てた宮尾神社には碑がある。